

対馬の漁村・農村における子どもの 総合的学習での地域づくり

畑島 英史¹・清野 聡子²

¹正会員 教職修士 対馬市立仁田小学校
(〒817-1522 長崎県対馬市上県町檜滝326番地, E-mail:nanamiirai@yahoo.co.jp)

²正会員 工博 九州大学大学院工学研究院環境社会部門
(〒819-0395 福岡市西区元岡744, E-mail:seino@civil.kyushu-u.ac.jp)

本稿は、小学生が漁村や農村における景観から問題を発し、地域づくりに関わった実践を報告する。漁村集落である対馬市上対馬町豊・鰐浦地区、農村集落である同市上県町仁田地区に属する小学校の実践である。総合的学習において地域の特徴を調べ、地域の課題を発見し、多様なセクターと関わることを通じて、地域の未来像を考える学習を実践してきた。小学生における「地域づくり」の実践である。現地調査を通じて、漁村の歴史的遺跡である「鯨組のお墓」との出会い、漁船や漁港など漁村特有の景観から地域づくりを学び、児童は新聞作りや対馬市が企画した「対馬学フォーラム」で発表してきた。これらの活動は、新聞の配布やポスターの展示、地区総会等で発表することで周囲の大人に大きな影響を与えた。農村では、後継者不足から耕作放棄地が増加する現状に気づき、農業体験とビオトープの活動が始まった。

キーワード:鯨組, 参画, 人材育成, 対馬学フォーラム, 対馬

1. はじめに

「景観」とは海や川、山といった自然の情景と、漁港や田園、高層ビルなどの人工の情景も意味する。景観と直結する「地域づくり」では、自然・人工の情景を加味しながら、人々がよりよく生活するために維持・改善されてきた。古来から日本の食文化だけでなく、経済や政治の発展にも寄与してきた漁村や農村では、誰もが魚を水揚げする漁船、秋になると黄金色に色づく田園風景を毎日のように目にしてきたであろう。人々の営利のため漁村では、防波堤や防潮堤、荷揚場の建設など港湾事業が盛んに行われてきた。農村では、耕作面積の拡大に伴い、トラクターや耕運機など大型機械が導入され、田畑がきれいに区画整理されてきた。漁業や農業の繁栄期には、これらの土木工事によって、労働力が軽減され、人々の生活はよりよく改善されて豊かになったものであろう。

しかし、人口減少が加速している漁村や農村では、職業観の変化や水産資源の枯渇、農産物の価格低迷などの要因もあり、人材育成が追いつかず、後継者不足に陥っている。これまで築き上げてきた漁村・農村文化が失われつつあるのが現状である。日本各地で、ハード面は整っていても、マンパワーの不足が大きな問題となってい

る。地域づくりを主導する地域行政も、人材育成事業を立ち上げ、後継者不足の解消へ向け、IターンやUターン事業を全国的に宣伝して、説明会を実施し、補助金を用意しているものの、十分とは言えない。

そこで、本稿では漁村、農村に属する小学校が、教育課程に位置づく、総合的学習において漁村・農村文化の存続に向けて実践した取組みを論じたい。

特に、対馬市上対馬町鰐浦地区に現存する、16世紀末に西日本各地から対馬へ移住した「鯨組」について、児童の学びを中心に論じていく。児童が漁村について学び始め、鯨組の存在を知り、荒れ果てたお墓を見て、何か自分たちができることはないかと考え出した。鯨組が漁村の存続に寄与してきた歴史に気づき、対馬市が企画した「対馬学フォーラム」や近隣校で発表することで、周囲の大人に影響を与えたことについて、その過程と成果について掘り下げて論じていきたい。また、水産業の発展や漁村の存続のために制作したポスターについても、論じていきたい。

2. 対馬市立豊小学校及び対馬市立仁田小学校

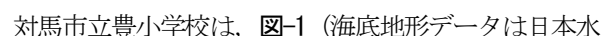
対馬市立豊小学校は、 図-1 (海底地形データは日本水



図-1 対馬市立豊小学校及び仁田小学校の位置

路協会，陸上データは国土地理院，図化は九州大学大学院工学研究院環境社会部門生態工学研究室）に示すように長崎県の離島，対馬の北端に位置する学校である．全校児童数 22 名（27 年度末）で，実践した学級は 5 年生 7 名，6 年生 1 名の複式学級である．学校目標「希望に向かって自ら考え，学び，鍛え社会に貢献する人間性豊かな児童の育成」のもと，PTA 活動，学校支援会議が盛んな学校である．地域には，歴史的な名所旧跡が残されているとともに，ヒトツバタゴ，アレチアザミといった貴重な植物が存在する．

同市中部に位置する仁田小学校は，全校児童数 53 名（30 年度 8 月末）で，実践した学級は 2 年生 7 名，3 年生 7 名の複式学級である．仁田地区は，漁業権を持たない瀬田地区，飼所地区，檜滝地区からなる農村集落と，漁業権を持ち，半農半漁を営む犬ヶ浦地区，御園地区，越高地区があり，さらに伊奈地区，志多留地区は水産業を営む漁村集落が混在する地区である．伊奈地区は，民俗学者である宮本常一氏が記した¹⁾ 村里の合意形成の文化とよいてよい「寄り合い」が存在していた．対馬の風習が記された貴重な地区を有するといつてよい．

3. 漁村での実践

(1) 子どもの学び

本実践は，NPO 法人離島経済新聞社と連携し，地域の特色である固有の動植物，郷土料理などを事例に「うみやまかわ新聞」を作成する活動を通して，漁村で生活する大人にヒアリング調査したり，上対馬町誌などから文献調査をして，「対馬らしさ」を探究する活動を行った．漁村の暮らしの歴史を紐解くかぎとなったのが「鯨組」の史跡であろう．本稿では，地域の歴史的遺跡である「鯨組」を新聞記事にする活動を取り上げる．鯨組とは，江戸時代中期から昭和初期にかけて対馬を含めて，日本各地へ移住してきた捕鯨を目的とする漁民の組織である．地域の歴史家に話を聞いたり，上対馬町史などの書籍で調べたりする活動を通して「対馬らしさ」を深め，今，自分たちができることを地域に投げかける社会参画を考えた．



写真-1 鯨組の人たちが使っていた井戸



写真-2 荒れ果てた鯨組のお墓の全体像

(2) 現地調査と鯨組の遺跡との出会い

平成 27 (2015) 年 9 月, 地域の歴史家である武末俊紀氏から漁村の歴史を語る上で, 考えてほしい歴史的遺跡があることを担任である筆者から児童へ伝え, 校区である鰐浦地区の鯨組の遺跡へと向かった。

児童は到着すると井戸 (写真-1) があることに気付く。この井戸の所以をきっかけにして, 江戸時代から昭和初期にかけて「鯨組」と呼ばれる捕鯨組織が対馬各地に存在し, 西日本の各地から鯨を捕りに移り住んでいたこと, 漁業の発展に寄与したことなどを教えられた。

すぐ山手には, 鯨組の墓地 (写真-2) があり, 児童はその存在に気づき, 墓石を眺める。人物の名前の他, 「勝浦」, 「平戸」などの地名が彫り込まれていることから説明通りに島外から来ていたことが明らかになった。

墓石を眺めながら, ある児童が倒れている墓石を見て, 反射的に起こそうとした。しかし, 武末氏から墓石が倒れているのは, イノシシやシカなどが荒らしているからだの説明を受けるとすぐにあきらめた。児童は, これまでの経験で知る墓石の姿と鯨組の倒されたままの墓石を比較して自分たちでこの墓をどうにかしたいという気持ちが湧き上がった。また, 武末氏は, 対馬に多様な恩恵を与えた先人の遺跡をこのままにしていよいかと課題を持っていた。その思いが児童に伝わり, それ以後, 「うみやまかわ新聞」の 1 面に鯨組を特集することを決めた (詳細はうみやまかわ新聞ホームページを参照: <http://umiyamakawashinbun.net/post/139656679541/> 対馬で栄えた鯨組)。さらに荒れた遺跡に何か自分たちにもできないかと年間を通して行動を考えていくきっかけとなった。

(3) 鯨組についての情報収集と整理分析

児童は, 鯨組について上対馬町誌と町誌編集委員の洲河真紀氏にいただいた対馬古文書研究会より発行された公式情報をもとに文献調査と漁業関係者に現在の鯨の存在状況をヒアリング調査した。

漁業従事者から今でもミンククジラはいるが, 文献調査ではセミクジラやザトウクジラなど多種類の鯨がいたことがわかった。また, 網取式捕鯨の導入から近代漁業の立て網漁や刺し網漁など網を使った漁法へと漁業が発展したことに気づいていった。さらに, 鯨組は大集団で山から監視する人と浜辺で待機して捕獲する船乗りや捕った鯨を解体する人など組織的に分かれていたこと, 鯨の骨や肉は肥料に使うことで農業技術も発展したことを調べることができた。5 年社会科産業の学習と関連付けながら理解を深めていった。

このことから児童は, 鯨は対馬にとって貴重な資源であったこと, 鯨組は仕事を役割分担して組織として運営

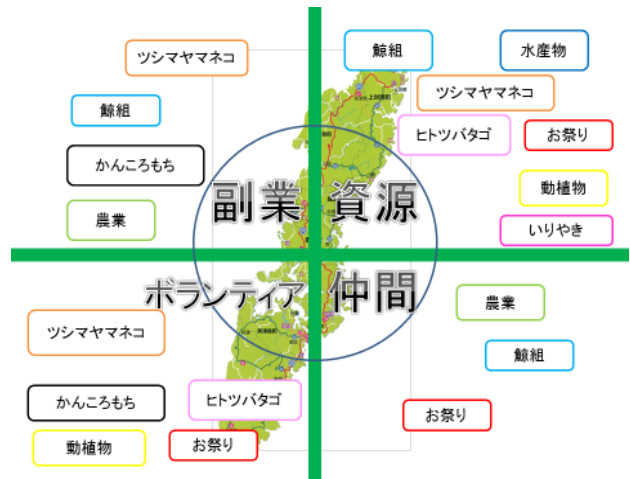


図-2 鯨組を含めた「対馬らしい生き方」のXチャート

されていたこと, 鯨を捕るという漁業と鯨の余った部位を肥料として農業も発展したことを整理できた。

すなわち, 児童らは図-2 に示すように鯨がいたからそこに産業が生まれ, 鯨の全ての部位を無駄なく活用したという「資源」, 他と相談しながら進める「仲間」, 1つの仕事では暮らせない「副業」へと思考を深めるに至った。

(4) 鯨組の学習を通じた地域づくりへの関わり

平成 28 (2016) 年 2 月, 児童は出来上がった新聞を配付する途中, 鯨組の遺跡へと向かった。着いてから再度どうするのか考えた結果, 倒れた墓石を立て直すのは漢字が読めないことや墓石の原型が分からないこともあり自らが立て直すことをあきらめた。しかし, 先祖を祀る習慣があり, 「お墓を掃除したい」との声が高まった。早速, 土地の持ち主, 地区長さんに電話をかけ, 許可をいただいた。

掃除当日 (写真-3), 地区長さんが鯨組の遺跡に現れ, 児童にお礼を言ってくださった。その場で, 地区の人たちが児童の行動を見て, 地域から鯨組の遺跡を守るために柵をつけようという意見が出ていることを知り, 全員



写真-3 鯨組のお墓の掃除する児童

で喜んだ。自らが鯨組の存在に気づき、鯨組の歴史を深く学び、その歴史的価値を認め、お墓掃除へと行動したことが地域に広がり、そして地域が動き出したこと、自分たちが役に立ったという自己肯定感が喜びにつながったと思われる。すなわち、「地域づくり」へ小学生が参画した実践であると筆者らは考えている。

(5) 鯨組の学習を通じた地域づくりへの情報発信

情報発信する手段として、児童は「対馬らしい生活」を図-2のようにXチャートにまとめ、口頭発表することにした。Xチャートに整理したのは、児童との話し合いの結果、4つのカテゴリに分けられることを見出し、鯨組を含めて、カテゴリ分けできたからである。

口頭発表は、平成27(2015)年11月には、豊小学校で毎年開催される「ふれあい学習発表会」、12月には対馬市厳原町で「第1回対馬学フォーラム」(写真-4)、翌年1月には、近隣校での発表会が設定されていた。また、同年2月には、新聞作りを通して、全国12カ所の小学校や地域が集まって開催される「第2回うみやまかわ新聞東京発表会」でも発表する機会を得た。さらに、平成28(2016)年8月には、立教大学社会学部でESDの研究者である阿部治氏が学生と来校して豊地区公民館で発表すると共に、鯨組の遺跡に案内した。そして、平成29(2017)年3月には、お世話になった地区へ学びの成果を発表したいとの思いから鯨組の遺跡が存在する鰯浦地区の総会に出席させていただき発表した。

情報発信の手段は、口頭発表だけではない。「うみやまかわ新聞」を豊地区、鰯浦地区の全戸に配布するだけでなく、児童自らも自転車に乗って配付したり、近くの商業施設に新聞を置きかせていただいたりした。

つまり、歴史的遺跡である鯨組のお墓の存在と、そこをどうにかしたいという児童らの思いは、多様な情報伝達の方法で、地区から、町内、島内へと発信された。

すなわち、荒んだ景観から学びへ転じ、その学びの成



写真-4 第1回対馬学フォーラムで発表する児童

果は多様な情報発信の手段を通じて、全国、いや全世界へと情報発信されていると推察できよう。

(6) 漁村の未来を願ったポスターの制作

平成29(2017)年9月から豊小学校では「水産業の未来」をテーマに総合的学習に取り組んだ。

児童は漁業従事者や上対馬漁協協同組合や対馬市水産課などの漁業行政関係者など、多様なセクターと話し合いを通じて図-3に示すポスターを作成するに至った。

このポスターに掲示されるブリなどは調査した豊・鰯浦地区で多く水揚げされる魚である。日頃から港で水揚げされる様子を目にしたり、頂き物として口にしたりすることの多い魚でもある。

右下に、ごみを抱えている写真がある。これは、近年、対馬で問題視されている漂着・漂流ごみをどうにかしたいと考えた児童の訴えでもある。児童は、実際にごみ拾いに出かけ、隣国の韓国や中国から流れてきたごみが漂着していることに加え、漁具や漁網もあり、同じ対馬の島民が流したものもあることに気がついた。ポスターは市内の公民館や交流センターなどの公共施設、上対馬町内の飲食店や商業施設など多くの場所で掲示されている。また、このポスターは市が毎月発行する広報「対馬4月号」に掲載された(対馬市発行の広報「つしま」：<http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/live/kouhou/images/201804/kouhou201804.pdf>)。



図-3 児童が作成した漁村の未来を願ったポスター

対馬島内には広く、情報発信されていることであろう。すなわち、このポスターも鯨組の実践と同様に、対馬島内及び韓国の観光客へ漁村の地域づくりの必要性を訴える価値のあるポスターであると言えよう。

4. 農村での実践

平成30(2018)年4月から第一筆者は、同市仁田小学校に異動した。そこでは、前述したが古来より農村の文化が営まれてきた瀬田地区がある。写真-5に示すように、田園風景の中に、伝統野菜であるサトイモ畑がある。仁田地区は、大きな仁田川があり、仁田ダム、目保呂ダムが建設されるまでは、川から水があふれる洪水被害に苦しんでいた。そのような環境でも、洪水に強い作物としてサトイモの栽培が持続的に続けられていると推察できる。しかし、対馬市農業委員会にヒヤリング調査すると瀬田地区の属する仁田地区では、近年700筆もの農地が耕作されておらず農地の登記から外されている現状を耳にした。

児童は、同年5月に社会科の「まち探検」の学習で、学校から北側に位置する瀬田方面へ向かった。すると、児童は「畑ではなく、草むらが多い」と口にする。区画が整理され、きれいに田畑が広がっているものの、児童の背丈ほどに伸びた雑草が茂る現状を目にした。そのような草むら、耕作放棄地で、農林水産庁から農業の多面的機能発揮対策の事業の補助金を受けて、農村文化の普及啓発事業を進めている農家の方々と出会う。「耕作放棄地をどうにかしたい。一緒に田畑に戻さないか。」と問われ、児童は耕作することを決意し、即答した。児童は、5月末から地域の方々と協働しながら、耕作放棄地を畑やビオトープに変えた(写真-6)。7月には畑に児童の希望で植えたミニトマトやトウモロコシ、



写真-5 他と並列する伝統野菜のサトイモ畑



写真-6 耕作放棄地を田畑に帰る児童の様子

オクラにインゲンが実り、収穫することもできた。ビオトープには、昔は対馬のどこの河川でも見られたマツモを入れたところである。

すなわち、農村の伝統文化を守ろうとする取組みが始まったばかりである。

5. 結語

本稿は、漁村、農村での子どもの総合的学習における地域づくりの実践を論じた。

漁村では、鯨組といった水産業と関わる歴史的遺跡の景観から問題意識を発し、多様な機会を通して知の普及と遺跡の維持・保全を訴える活動へとつながった。

また、大人が知らない知を児童が学習することで、地域の大人が驚嘆し、保存活動への意欲付けとなった。

さらに児童が行った新聞の発行やポスターの制作は地域づくり、すなわち、参画へと位置づけられると考える。

農村でも、漁村と同様に、田園風景の中の耕作放棄地の景観から問題を発し、児童の学びにつながっていく。

謝辞：本研究の中心となった鯨組の資料調査において武末俊紀氏には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表す。また、児童の総合的学習に協力して下さった豊地区、鱈浦地区、瀬田地区の方々にも合わせて感謝の意を表したい。他にも、本研究の一部は環境省環境研究推進費S-13より支援をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 宮本常一：忘れられた日本人，pp.11-21，岩波文庫，1984